

することができた。夏の日長でみんな退屈して、私が毛布のきれで手袋みたいなのをつくり野球を始めた。みんな喜んで夜の十時過ぎまで飛び回った。十二時過ぎにならなければ暗くならない白夜、みんな楽しかったようだ。

このころには、隣の収容所は帰国したそうだとだけれかが言い、近いうちにみんな帰れるようだと言報が流れていた。待ちに待った帰国命令が来たのは七月に入ってからだった。みんなに伝えたら躍り上がって喜んで。仲間の顔が今でも思い出される。

翌日の夕方列車が入り、全員乗り込んだ。列車の走り出したのは暗くなるころだった。貨車の四〇両くらいの編成だった。十二〜十三日くらい乗ったと思う。着いたのは海の見えるナホトカだった。やっと日本へ帰れると実感がわいてきた。

乗船待ちということで十日余りナホトカで軽作業をし、乗船したのは八月一日ごろだった。

「明優丸」に乗船、舞鶴に着いたが、何日か船の中で待たされ、上陸したのは七日ごろと記憶している。

復員した時は、戦後の混乱が落ち着き始めたころだった。苦しかったり、悲しかったり、嬉しかったり、さまざまな生活をしながら今日まで生き抜いた。ソ連での苦しみが私の人生のよい教訓となった。昭和二十年十月入ソして、二十四年八月に復員した。今、元気でいられることに感謝している。

少年兵の生と彷徨

大阪府 西本 英明

我が百二十六師団歩兵二百七十七連隊津端隊は、陣地構築のための先発隊として、東満の山中にテントを張り宿営中だった。

まだ他の隊や本隊が来ておらず、夜は野獸よけに焚き火をし歩哨に立つ。敵の襲撃に、いつでも応戦できる態勢で、森閑とした山中での歩哨一時間は長く感じる。このころ武装諜者が、頻繁に出没するという情報が入り、気の抜けない状態が続く。やっと連隊の主力

が移動してきて、ホツとする。

私たちの野営地から、我が中隊の高橋曹長が、本部に命令受領に行くことになり、私にその護衛を命じられた。どういうわけか私によく指名がかかる。

私たちのいるところは、地形が北海道によく似ているとかで、ここで訓練をして後、北海道へ移るといふ噂が流れていた。防寒服で戦闘ができるように、十分幅員をとって塹壕を掘り、後にソ連軍に寝首をかかれるとも知らず、米軍との決戦に備え戦闘訓練が行われた。

連隊本部前近くに、丸太造りの営倉等も出来、こんな山奥に何故?と不思議に思ったものだが、陣地撤収まで使用されたとは聞かなかった。

糧秣もなかなか届かず、食べられる野草・ゆり根や花・アカザ・ノビルなどを取る班や蛇など取る班が編成され、班員には主に長野県や在満開拓団出身の兵が当てられた。彼らは本当に素晴らしい知恵と腕前を發揮し、時には生肉などにもありつくことができた。野草捜しに行った折、犬を捕らえてきて瞬く間に料理を

する。新しい肉はしばらく土の中に埋めておくのだと、ホウロウの洗面器に入れ土の中へ埋め置く。こうしておくとうまいのだと言う。

久しぶりにおいしい肉にありつける。彼らのように土に生きたものたちの知恵は、都会生まれの人間には及びもつかず、お陰でどれだけ助けられたことか。

時には伊林の野戦糧秣倉庫の警備に行き、たまに朝鮮人部隊へドブロク(酒)を買いに行かされたが、その娘さんに好意を持たれ、親父さんから戦争が終わったら娘と一緒になってくれと口説かれ、困ったこともあった。

この家の前に、ひまわりの花が色鮮やかに咲いていた。今でもひまわりの咲く季節になると、五十余年前のときの親父さんや娘さんのことが頭をよぎる。十八歳の少年兵の頭に焼きついた追憶はなかなか消えない。

新しい命令で、吉林へ馬匹の輸送に行った。地名も場所も忘れたが、小さな小学校で一泊した。カボチャの入った飯の朝食をとっていると、爆音と同時にドカ

ンという音がした。

見ると真ッ黒な航空機で、我が友軍機が何という演習をしているのだとぼやいていた。すると学校の職員から、兵隊さんたちがいると目につくのですぐ退去してほしいという。なんだか様子が変だ。そうこうしているうちに馬が駆けてくる。馬上より憲兵が、ソ連軍が攻めてくる、直ちに本部へ戻れという。

昭和二十年八月九日、急遽本部へ戻ると直ちに命令受領に行く。

高橋曹長の護衛に着けとのこと。連隊は大混乱、直ちに陣地を撤収して牡丹江方面に転進する。休むこともなく夜通し行軍を続け、やっと樺林到着。

陣地撤収より、ろくに食事もなく、辛うじて朝食にありつくことができると思う間もなく、後方より騎馬伝令が「後方敵戦車」と大声で行く。朝飯どころではない、直ちに応戦態勢はとったものの陣地は大崩れ、更に掖河へと後退を余儀なくされた。そこでやっと小銃弾百二十発、手榴弾二発を受け取る。

襟に座金を着けた幹部候補生の一隊に出会う。肉薄

攻撃に行くという。その中の一人が、和歌山県人はおらんかと叫ぶ。返事をする、貴様が無事に帰ったら我が父母に渡してくれぬかと手紙を預かる。手紙というより遺書だったのではないだろうか。牡丹江省磨刀石まとうしに出陣した九百二十名の幹部候補生たちは、熾烈なる敵の銃火の中、敵戦車に爆雷を抱えて突入し、二日間の戦闘で大半が散華された。この中に六名の和歌山出身者がおられた。この遺書を何とか守り通したかったが、四年のシベリア抑留中ソ連兵の略奪・強奪に遭い、守り通せず、申し訳なく今でも悔やまれて仕方がない。

怒濤のごときソ連軍の進撃、砲煙弾雨の東瀛の山野ソ連戦車の砲に丸裸の日本女性を括りつけて進撃してくる。我が軍の命令は伝わらず、後退に継ぐ後退、気がついてみると大迫一等兵と二人だけになっていた。更に二人で後退途中、幼い子を背負い、子連れの母と子がとぼとぼと歩いている、数人と出会う。何か食べたかと聞くと、もうここ何日も食べ物らしいものは食べないと言ふ。カンパンや缶詰の入った雑糞ごと

渡してやる。「兵隊さん弾運びでも何でもするから一緒に連れて行ってください」と言われて別れる。無事に逃げてくれば願うのみ、下級兵士の私たちにはどうすることもできず、後年、関東軍は在留邦人を見捨て見殺しにしたと言われたが、下級兵士の私たちにも責任の一端があるように思え、あの時の母や子供は、無事に祖国日本に帰りついたのであるかと、五十余年前のことが思い出され心苦しい。

樺林及び掖河の激しい戦闘は十一日から十二日だったと思う。海林を過ぎたあたりの朝鮮人部落の一軒の家に泊めてもらう。翌朝まだ暗いうち「兵隊さん早く起きなさい、ソ連軍がそこまで来ている」また「四軍と五軍の軍司令官が会見している」などと、当方が知らない情報まで教えてくれる。大迫一等兵と二人でなければしの金を謝礼として渡し友軍を追って山に入る。山中を彷徨するうち、老女を中心に女性ばかりの自決の現場に出会う。その凄惨な光景にハッと息を飲む。十八歳の私には心底こたえ、いまだに夢に見ることが

ある。合掌。

なおも山路を歩き、人家のある方へ出ようと思ったとき、出会い頭にソ連兵と遭い、しばし交戦、銃弾が心もとない。また山路をたどり、やっと横道河子近くに達した。しばらく行くと憲兵に出会う。事情を話して我が二百七十七連隊の駐留地を聞き出すことができた。ようやく連隊を捜し当て、お互いに無事を確かめ合い、高橋曹長にも事の次第を報告する。

ノモンハン生き残りの方だった隊長津端大尉は戦死されたとのこと。

八月十五日に停戦になったと、十八日に聞く。停戦というからには、敵・味方五分五分の停戦じゃあないかと皆が言い合う。

部隊長山本大佐は「国体護持の停戦だ、諸子は軽率妄動をしないように」と言われるが、山頂から見える光景は、戦車は轟音を上げ土煙を巻き、敵機甲部隊や歩兵が南へ南へと進んで行く。停戦らしい様子は何もない。変だ変だ、騙されたのではないかと皆が疑惑を持つ。

よし徹底抗戦だ、糧秣・弾薬を持てるだけ持ってソ連兵と戦おう、「関東軍が負けてたまるか」と勇み立っていると、曹長が来て「お前たちを無事に内地へ連れて帰る任務がある」と言い、命令を聞かぬと切ると軍刀を抜く。こちら小銃を手にかける。

まさに一触即発の状況、しばらくして曹長が軍刀を納めるや、お互いの頬に涙が流れていた。この場に居合わせた者で、この後の長い〔シベリア抑留〕をだれが予想し得ただろうか。

武装解除、昨日まで我が身を守った銃や剣が無造作に野積みされ、完全に手入れをした兵器がトラックに放り込まれるのを見ると、何が停戦だ、これは負けたのだと戦友たちとボソボソ話す。

これよりシベリアへの途

横道河子より昨日まで戦い撤退した道を逆に歩かされ海林へ、海林で混成作業大隊（一個大隊千人単位）に編成される。

伊藤甚之助大隊長・戸沢副官・吉野・星野・今田良治の各少尉。（今田氏とは平成六年八月二十三日神戸

市の王子ギャラリーでのシベリア慰霊絵画・写真展の会場で偶然お会いする、実に四十九年ぶり）

この海林で偶然、初年兵時代お世話になった寺川隊長と出会った。戦友御宮知と二人でお別れしてから今日までの経過、特に陣地や戦闘の模様についてのお話をする。寺川隊長からは「ウラジオストック經由帰国するのではないだろうか、短気を起こすな、無事に内地に帰ればまた会うこともあるだろう、もう戦争は終わったのだ」と懇々と諭される（後年この人とは昭和五十四年再会）。これで私の気分も大分静まる。

海林の兵器廠・拉古の病馬廠・牡丹江・愛河・磨刀石（石頭予備士官学校生勇戦死闘の場所）・代馬溝・穆稜・下城子などで野宿を重ね、氣息奄々えんえんとひたすら歩く。軍隊用語で言う戦場掃路の終わった道とはいえず、その凄惨さには思わず目を覆いたくなる。ほんの数日前勇敢に戦った我が軍の勇士の屍の上を、我々は歩いているのだった。勝利者の土饅頭（墓）には銃を逆さに突き刺したり鉄兜を掛けたりしているが、我が軍の戦死者の墓は一個も見当たらない。道の端より手が出

たり足が見えたり、見習士官の遺体があったり、後ろ手に縛られた邦人がパンパン腹を膨らみ死んでいる姿は、誠に無残。このような光景は十八歳の私にこたえた。軍馬の死体、横転した軍用トラック、戦闘機が野原に突き刺さっているような光景も目についた。

綏陽・綏芬河と、終わりには、あのよく歌った「風吹く夕べ北満のスクラニチャの丘に立ち見渡す平野グロデコフのソ連のトーチカ灯が見える」のグロデコフで野宿、九月の十五日に雪が降ったのを五十余年後今でもよく覚えていて、ここでの野宿が約一カ月続く。

あの長い長いシベリア抑留が、このグロデコフから続いているのも知らず、「ウラジオストツクから東京ダモイ」に騙されて、貨物列車に乗せられて着いた所がタイセット八十六キロ・第十二分所、時に昭和二十年十月のこと。枕木一本に日本兵一人が死んだと世にいわれる、バム鉄道建設・工事に従事。タイセット地区には四万人が強制労働に従事、うち三千人から五千人もいわれる死者を出す。その死亡率はシベリア抑留地で最も高かったと言われている。

何とか死の労働に耐え抜き、次に二百二十七キロ建物のない山中暮らし。自分たちの住む建物から作らなければ。次いで二百三十一キロ・二十二キロ・キロ数不明の三カ所。シラミや南京虫に悩まされ、思想改造、日本人が日本人を密告、劣悪な食事……。

計七カ所を転々と移動させられ、過酷な労働に耐え抜いた。この間、目にしたこと、聞いたことは、秩序の崩壊した満州は地獄の様相だ。ソ連軍による略奪・強殺・強奪・強姦などと、悪逆非道の限りであった。十八歳の少年兵は、大きな時代の波に翻弄されながら、大日本帝国と日本陸軍七十七年の歴史の幕と、関東軍四十年、そして満州国の崩壊を見届けた。

心身共にボロボロになり、やっと祖国に辿り着いたのが昭和二十四年七月二十二日、復員船「遠州丸」にて、夢に見た祖国へ、舞鶴上陸。変わり果てた郷土和歌山に着いたのが七月二十七日。すでに父なく、母なく、その日から落ち着く所なし。父母の墓標にすがりついて泣いたことが、昨日のように思う。

私の貴重な青春は、無法な抑留の苦難苦闘でシベリ

アの地にむなしく消えてしまった。

わたくしの人生

兵庫県 森田 純

私は、兵庫県加東郡福田村（現在は社町）沢部の純農村の地に、大正の末期（大正十五年三月）、祖母と両親、そして男四人、女三人の七人兄弟の長男として生まれました。

幼少のころより農耕に従事させられ、農業に対する疑問をもって仕事の手伝いをしていました。父からよく聞かされた言葉に「学問と健康」は人間生活の鍵だ、だから努力せよということでありました。

昭和十四年三月福田尋常高等小学校高等科二年を卒業し、大望の兵庫県立農学校に同年入学し、一学期繰上げて昭和十六年十二月に同校を卒業しました。

当時は太平洋戦争も激化し、戦況も余りよくない状況でした。また、食糧増産の時代でもあったわけです。

国内情勢から考え、私の上級への進学も断念せざるをえませんでした。そして、父のはからいで実業家をめざしました。

東洋製缶株式会社の姉妹会社が満州国大連（旧名）にあり、その社名は満州製缶株式会社といって空缶製造の会社でした。

この会社に昭和十七年一月入社いたしました。缶詰製品を作るには空缶技術、知識を修得せねばということとで約六カ月の予定で空缶専門に研究をしました。

同年八月に吉林省公主嶺市（旧名）に缶詰工場を建設する予定でその地に転勤し、工場建設と軍需産業としてスイトコーンの缶詰の研究を命じられ、満州平野に適したスイトコーンの栽培を満系に委託し、爛熟期に収穫して、カッターで削り、汁をしぼって食塩を加えるだけですばらしい軍需食糧が生産できる研究に成功し、工場が早く完成する日を待っていました。

昭和十八年三月公主嶺市で徴兵検査があり、一日で検査が終わり、甲種合格が国防婦人会の前で決定いたしました。